

## 蘇州古代史(1)      城郭構造

著者	谷口 満
雑誌名	東北学院大学論集．歴史学・地理学
号	25
ページ	123-173
発行年	1993-02-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00024201/">http://id.nii.ac.jp/1204/00024201/</a>

# 蘇州古代史（二）

——城郭構造——

谷口

満

顧頡剛の遺作『蘇州史志筆記』（江蘇古籍出版社・一九八七年）は蘇州研究にとって必読不可欠の著作である。顧氏は周知のように蘇州出身の学者であつて蘇州に対する愛着はきわめて強く、その歴史と文化についての理解も当然群を抜いている。一々の注記は省略したけれども、本研究も多くの点でこの筆記を参照しており、この筆記の刊行が研究の遂行を可能にしたといつても過言ではない。遺稿整理にあたられた王熙華氏の労苦を多としつゝ、あえてこのことを冒頭にことわつておきたいと思う。

## 序

一九八六年、蘇州は建城二千五百年を迎え、それを祝うさまざまな行事が開催された。<sup>(1)</sup>蘇州の初建は春秋晚期吳王闔廬の時と伝えられており、闔廬即位の元年はB・C五一四年であるから、この元年に建城が開始されたと考える限り、一九八六年は確かに建城二千五百年に当たることになる。

\*闔廬が伍子胥に命じて蘇州城を建造させたことは、多くの史書が伝える所であるが、闔廬時代の建造ということ自体は確かな事実であると思われる（後述）。ところが、では闔廬即位後のいつ建造が開始されたかという点になると、実は必ずしも明らかではない。なぜなら、先秦・秦漢の文献資料のなかに、築城開始の年次を明記した例を発見することができないからである。唐・陸広微の吳地記が「闔廬城、周敬王六年、伍子胥築」と記すのをはじめ、後世の地志類の多くが周敬王六年＝闔廬元年と明記しているのは、確たる証拠をもつてのものでは決してない。おそらく、確実な証拠の有無とは関係なく、いつとはなしに闔廬元年始建という理解が常

識的理解として通行するようになり、吳地記以下の諸書はそれを採用して記載したにすぎないのであろう。この常識的理解は現在でももちろん通行しており、蘇州観光案内の類にも闔廬元年始建と説明されている。蘇州始建年次についての理解としてはこれがもっとも有力なものであり、多くの支持を得て疑われることがないまま今日まで至っているようである。とりたてて論ずるほどの問題ではないが——というよりむしろ資料的に詮索不可能な問題なわけであるが——、闔廬元年という理解は正解でも何でもなく、その根拠の薄弱さという点では、闔廬二年以降とみる理解と何ら変わらないことを、一応注意しておきたいと思う。

始建年代がいつかということになれば、蘇州よりも古い都市はいくつか存在する。まず最古の例としてあげねばならないのは、いうまでもなく偃師尸鄉溝故城であろう。これが殷都西亳であるかどうかは議論の分かれるところであろうが、殷代早期の建造が確かであるとすると、その始建は蘇州のそれをおよそ千五百年も遡ることになる。また、殷周革命の後いづゆる西周封建にあずかった諸侯は各々その所領に都城を建設したと伝えられており、それらのうちいくつかが発掘・調査されているが、その代表は周知のように魯都曲阜城である。現在もその一部分が残存している周長二〇kmにもおよぶ大城壁は、すでに西周のはじめごろ建造がはじまったことが、考古遺物によって確認されたという。この場合、始建は蘇州のそれをおよそ五百年遡ることになる。

しかしながら、偃師故城の場合、その繁栄はどうも長く続かなかつたらしい。存続期間の詳細は不明であるものの、少なくとも殷代限りをもって廃棄されたようである。曲阜の場合にあつても、魯国国都の使命を終えた後も曲阜城（魯国都城）として都市機能を確かに今日まで継承してきてはいるが、しかし秦漢以降の県城は先秦大城の



西南隅をしめる一小城にすぎず、城壁規模が大きく縮小され、曲阜は山東地域の首邑の地位から転落してしまっているのである——城壁規模の縮小自体は必ずしも都市の衰退を示すものではない。大城壁の要不要と都市の発展・衰退とが対応の相関関係にあるとは限らないからである。ただ、曲阜の場合、先秦大城の廃棄は曲阜の衰退に対応しており、西周・春秋時代には中国有数の大都市であったものが、しだいに衰退し、秦漢以降は山東の一地方都市に成り下がっている——。

この点、蘇州はその始建以来今日に至るまで、その城壁の構造と規模をほとんど変えることなく、しかも長江下流域の首邑の地位を一貫して維持しつつ、二千五百年の長きにわたって存続してきた。中国史上、このような都市は他に例をみない。言い換えれば、蘇州は古代には第一級の古代都市であり、中世には第一級の中世都市であり、近世には第一級の近世都市であったのであり、したがって、蘇州の歴史には中国史の古代・中世・近世がさながらに表現されているかもしれないのである。蘇州史研究は、このようにして、中国都市史研究の中でもっとも大きな成果の見込まれる研究分野でなければならないであろう。

\* 周知のように、蘇州は当初春秋呉国の国都として創建され、その後封国の国都として、あるいは郡治・州治・府治の所在都市として、当地域の首邑の地位を維持してきた。ただ、このような治所所在都市としての政治的資格を喪失したことが、まったくなかったわけではない。隋の開皇十一年（A・D五九一年）——九年（A・D五八九年）ともいう——、蘇州に拠っている残賊を牽制するため、隋將楊素が西南一〇km弱の横山東麓に新城を築き郡治をここに移したのは、その一例である。この措置は、隋に代わった唐が江南を平定する武徳七年

(A・D六二四年)までの三十三年間継続されたという。しかし、これはあくまで軍略上の臨時的措置であつて、蘇州の衰退とはなんら関係はなく、新城の建造は蘇州の経済的實力にほとんど影響を与えなかつたであらう。そうであつたなればこそ、武徳七年に江南が平定されるや郡治はすぐさま蘇州に還つたわけである。また、他の都市と同様、戦乱による破壊をこうむつたことも一再ならずあつた。しかし、その回復力はきわめて強く、ほとんどの場合わずかな歳月で復興をはたしてしまつてゐる。これも他の都市にはみられない蘇州の特徴である。要するに、多少の変動・衰退はあつたけれども、それらは蘇州の長い歴史のなかでは無視することが可能なごく短期間のものにすぎず、蘇州史は大局的には繁栄の継続であつたといふことができるのである。

しかも、蘇州史に関する歴代の資料は他の都市に比べて相当に豊富であり、著名なものだけでもすぐさま五・六種類が思い浮かんでくる。

唐・陸広微 吳地記

南宋・朱長文 吳郡図経統記(以下、統記と略称する)

南宋・范成大 吳郡志

明洪武・盧熊等 蘇州府志(以下、府志と略称する)

明正徳・王鏊等 姑蘇志

これに、清・顧震壽の吳門表隱と近人王簪の宋平江城坊考を加えねばならないであらうし、その上、蘇州のありさまを記した歴代文人たちの詩文類がこれまた貴重な資料となつて今日まで伝えられてきている。加えて宋平江図と

いう宋代蘇州の実物の地図をも手にすることができるのであるから、まずは万全の資料態勢といってよいであろう。伊原弘氏の平江図読解作業や礪波護氏の詩文類の分析による唐宋蘇州の復原は、こういった資料状況から生み出された最新の成果であって、今後この種の研究はますます増加するにちがいない。

もっとも、右にあげた地志類を一見して明らかのように、資料が豊富であるといっても、それはもっぱら唐宋以降に限られている。唐代以前の資料となると、唐宋以降のそれに比べれば実は皆無に等しいのであって、唐代以前の蘇州史研究がきわめて零細なものも至極当然のこととして了解されよう。これは、なにも蘇州に限ったことではなく、他の都市にも多かれ少なかれ見られる資料状況なのであるが、蘇州の場合、唐宋以降の資料があまりにも豊富にだけに唐代以前の貧弱さがなおさら意識されるのである。

\*他の都市と同様、唐代以前の蘇州史研究には新資料つまり考古知見の増加が切に希望されねばならないであろう。しかし、繁栄の継続という蘇州の歴史がここではあだとなつて、その希望はほとんどかなえられそうもない。なぜなら、唐宋元明清および今日に至るまでの文化堆積層はその繁栄ぶりからしてかなりの厚さと考えねばならず、唐以前の文化層が現在の市街地の下から発見される可能性はきわめて小さいからである。事実、唐代以前の考古知見は今のところ断片的な遺物や孤立的な墓葬がほとんどで、他都市に比べて質・量ともに見劣りするようである。考古新知見が唐代以前の蘇州史研究に新機軸をもたらすような局面は、当面望むべくもない。

ところが先秦・秦漢の蘇州に限って言えば、一つだけ見落としてはならない資料が存在する。それは越絶書の外

伝記呉地である。越絶書は、その作者・成立年代などいささか疑問のある書物であるが、しかし扱い方如何によっては貴重な先秦・秦漢史資料となりうるのであって、ことに外伝記呉地の一篇は先秦・秦漢時代の蘇州の復元、いわば古代蘇州の復元に際して高い資料的価値を発揮することが予想される。その資料的価値は古代長安における三輔黄図のそれにおそらく匹敵するであろう。さらに幸いなことに、越絶書の姉妹書ともいべき呉越春秋にも関連資料が残されており——なかでも闔廬内伝の一篇——、これと合わせるとかなりの資料量が期待できる。蘇州古代史は、資料的に成果が見込まれないとして当初から放棄されるべきものでは決してなく、越絶書と呉越春秋の存在によって、ほぼ確実になんらかの成果を見込めるだけの資料をなんとか準備しうる研究分野なのである。

本研究は、この越絶書・外伝記呉地と呉越春秋・闔廬内伝を基本資料として古代蘇州の城郭構造・社会経済・文化風俗などを復元しようとするものである。ついては、まず手はじめに城郭構造、つまり内城壁・外郭壁・陸道水道の配置といった古代蘇州城の平面的構図の描写を試みたいと思う。誤説の多い越絶書・外伝記呉地の記事を分析して古代蘇州の城郭構造を復元しようとすること自体、資料操作の技術という点からしてきわめて興味ある作業なのであるが、しかしこの作業の意義はもちろんそれに止まるものではない。近年の中国古代都市研究のなかで主要な論議の一つとなってきた内城外郭式構造とその変遷という問題に、解決のための一資料を提供することになるであろうし、そしてなによりも、北方黄河流域の古代都市と南方長江流域の古代都市の城郭構造比較という早晚手をつけねばならない問題に、一つの基礎的資料を提供することにもなるはずである。以下の考察はもちろんこの二つの意義を常に念頭におきつつ進められねばならないし、そして最後の小結においてこの二意義に關する若干の検討

がなされることになろう。

なお、考察に先立って次の三点について了解を得ておかなければならない。第一は越絶書と吳越春秋の作者・成書年代に關してである。越絶書については、最新にして最良のテキストである楽祖謀氏の点校本越絶書（一九八五年・上海古籍出版社）に陳橋驛氏の長文の序があり、陳氏はそこで越絶書の作者・成書年代などについて正確で詳細な解説を行っている。それによると、作者を会稽の人である袁康と吳平、成書年代を後漢光武帝の時代——より正確には建武二十八年A・D五二年以降——とみる従来通行してきた意見は基本的には正しいという。陳氏が試みている委細な考証の検討は後日を期するとして、ともかく後漢はじめごろ会稽の人によって作られたものであることだけは確認しておきたい。吳越春秋については、後漢書・儒林伝に伝をもつ趙曄の作であることが常識となっている。彼もまた後漢はじめごろの人であり、しかも袁・平二氏と同じく会稽の人であるという（以下越絶書・外伝記吳地を記吳地と、吳越春秋・閩廬内伝を内伝と略称する）。第二は以下の考察で使用する越絶書・吳越春秋以外の資料に關してである。いかに貴重な資料とはいえ、この二書のみでは作業は進行しないのであって、他の資料、とくに先に挙げた吳地記以下の近世地志類も必要・可能な限りに於いて積極的に援用する予定である。第三は、「蘇州古代史」という論題に關してである。周知のように、蘇州という名称がこの都市に与えられるのは隋になってのことであり、本研究の対象時代となっている先秦・秦漢時代は吳もしくは吳城と呼ばれていたはずである。したがって、現今蘇州の先秦・秦漢史という意味で「蘇州古代史」という論題を使用してはいるものの、個々の考察では正しい名称ののちとして吳城という名称を使用することにしたい。また「古代」という概念であるが、中世は後漢か

ら唐中期ごろ・近世は唐中期以降、したがって古代は後漢以前という時代区分を使用したものであり、記呉地のカパーしている時代が好都合なことにちょうど古代に相当することになる——先に挙げた呉地記以下の地志類のカパーする時代がまさしく近世に相当する。ところが中世蘇州の資料となると零細をきわめ、蘇州中世史は資料的空白時代といわねばならない——。さらに一点、「古代」とせずにわざわざ「古代史」とことわった理由であるが、それは先秦から秦漢の推移のなかに何らかの変化の跡を見い出そうとする意図によるものであること、あらためて説明するまでもなからう。

## 第一章 大城・郭・小城

記呉地は呉城の城壁として次の四城壁を挙げている。本章では呉城の骨格を構成するこの四城壁について考察を加えることにしよう。<sup>(7)</sup>

- (1) 大城 周四十七里二百一十步二尺、陸門八、其二有樓、水門八、南面十里四十二步五尺、西面七里百

一十二步三尺、北面八里二百二十六步三尺、東面十一里七十九步一尺、闔廬所造也。(一九七七  
二m)

- (2) 郭 周六十八里六十步。(二八一八六m)

- (3) 小城 周十二里、其下廣二丈七尺、高四丈七尺、門三、皆有樓、其二增水門二、其一有樓、一增柴路。

（四九七四m）

- (4) 伍子胥城 周九里二百七十步（四一〇四m）

## 一 大城

大城を考察するに際して、なんといっても問題になるのは、伝えられている周長四十七里二百一十步二尺と南面・西面・北面・東面の総和に十里もの差が存在することであろう。すなわち、東西南北四面の総和は三十七里百六十一歩であり、十里強の差が存在するのである。まず、四は三のあやまりであり周長の実際は三十七里二百一十歩二尺である、という可能性を当然考えねばならないであろう。三を四にあやまるのは転写の際にしばしば生じた事態であろうし、周長と四面の総和がほとんど一致することになるのであるから、その蓋然性はきわめて高いといわねばならない。しかも記吳地にはこの蓋然性をさらに高めることになる記事が存在する。それは、いずれも大城の城門である閭門——婁門間と平門——蛇門間の直線距離であつて——前者は東西の直線距離、後者は南北の直線距離ということが出来る——、

邑中徑、從閭門到婁門、九里七十二步、……、平門到蛇門、十里七十五步、……。

と伝えており、当時の大城が完全な長方形であると仮定すると、その周長はこの東西距離・南北距離の和の二倍つまり三十八里二百九十四歩となり、どうみても四十七里二百一十歩二尺より三十七里二百一十歩二尺に近いのである——閭門と婁門・平門と蛇門が正しい東西一直線上・南北一直線上にあつたのかどうか、もちろん明らかではな

い。もしそうでないとすると、実際の東西線・南北線はこの九里七十二歩・十里五十歩より若干短いとみねばならず、四辺の和も三十八里二百九十四歩より短くなり、さらに三十七里二百一十歩二尺に近づくことになる――。

このように考えてくると、正しい周長は三十七里二百一十歩二尺であると決めてしまつてよさそうなものであるが、しかしそう単純にはいかない。たとえば、そもそも大城が完全な長方形であつたとは到底考えられないのであるが、ではこれをどう解釈するか、という問題一つをとつてみても、にわかに結論は出しかねるのである。この問題に明解な決着をつけることは資料的に不可能なのかもしれないが、本研究では、現行記吳地の伝える通り大城周長は四十七里二百一十歩二尺であつたとの前提に立ちたいと思う。それは次の理由による。

a 内伝は大城の周長を四十七里、文選・吳都賦・李善註所引越絶書は四十七里二百一十歩と伝えており、この両者は当然四十七里二百一十歩二尺の概数を示したものに他ならない。大城の周長を三十七里云々と伝える資料はなく、四が三の誤写であるとは考えにくい。

b 吳地記以下の地志類は、先秦・秦漢の大城がほぼそのまま後世のいわゆる羅城に継承されたとしている。そこで、歴代地志類所見羅城の周長を列挙すると次のようになる。

・吳地記 四十二里三十歩 唐里五二九mで計算すると二二二七〇m。

・統記 四十里 宋里五六〇mで計算すると二二四〇〇m

・府志 明代修築のことを記して、

自西閭門南至胥門、得六百三十九丈五尺、自胥門南至盤門、得三百八十八丈七尺、自盤門東至葑門、



得一千一百二十八丈、自閭門北至裏門、得八百六十四丈二尺、自裏門北西至齊門、得五百八十丈、自齊門西至閭門、得八百九十二丈二尺五寸、總計四千四百八十二丈六尺五寸、而一萬二千二百九十三步九分、計三十四里五十三步九分。

と伝えており、この三十四里五十三步九分を明里五五九・八mで計算すると一九二一六m。

多少の差はあるけれども、いずれも漢里四一四・五mで計算した四十七里二百一十步二尺〃一九七七二mにかなり近い値である。三十七里二百一十步二尺〃一五六二七mではこれらの値と離れすぎている。

c 他の先秦・秦漢都市の例からしても、大城の城壁は完全な直線ではなく各所に屈曲をもつ曲線であったはずである。周長がこれら屈曲そのままにそって測定した曲線距離であるとすると、それは閭門——裏門・平門——蛇門の直線距離の和の二倍よりも当然長くなり、十里近い差が出るのはむしろ当然である。周長が三十七里二百一十步二尺であるとすると、屈曲のほとんどないほぼ完全な長方形となり実状に反することになる。

四十七里二百一十步二尺という数値をそのまま採用すべきであることが、一応了解されたことと思うが、ただ四十七を三十七のあやまりではないかと疑う発端となった、周長と四面総和の差をどうみるかという疑問までがこれで解決してしまったわけではない。周長四十七里二百一十步二尺は正しい数値であるとの前提を得た今、この差を生じせしめている原因は東西南北四面の距離に求めねばならないであろう。四面の各距離と閭門——裏門・平門——蛇門の距離を今一度列挙してみると、

東面 十一里七十九步一尺

平門——蛇門 十里七十五步

西面 七里百一十二步三尺

南面 十里四十二步五尺

閭門——婁門 九里七十二步

北面 八里二百二十六步三尺

であつて、まず氣付くのは北面と西面がそれぞれ閭門——婁門・平門——蛇門より短いこと、ことに西面が極端に短いことである。南面・東面が東西直線距離・南北直線距離よりともにおよそ一里長いというほぼ正常な値をとっているのに対して、東西直線距離よりも北面が百五十歩弱およそ二〇〇m短く、南北直線距離よりも西面が二里二百六十歩強およそ一二〇〇mも短いという事實は、どのような議論をもつてすれば解釈が可能なのであろうか。この問題を解決するにあたってはその前提において二つの場合を設定しなければならないであらう。

第一の場合 四面の數値は大城の周長・大城の陸門・水門の設置數に続いて記されているのであるから、あくまでも大城城壁の東西南北部分の城壁長である。

第二の場合 四面の數値は必ずしも城壁長とは限らない。城壁内側の何らかの境界線分、たとえば水路の長さであつたかも知れない。

第一の場合であるならば、四十七里二百一十步二尺という周長が大城城壁の全長であるのに対して、四面の數値は各面城壁の全長では決していないことになる。言い換えれば、四面の距離にカウントされずして含まれていない部分が存在することになるのである。たとえば、平門——閭門間の西北屈曲部が西面の北部分・北面の西部分に

カウントされていないとすると、西面は南北直線距離のおよそ一〇分の七、北面は東西直線距離のおよそ一〇分の九となり、記吳地が示している西面七里百一十二步三尺・北面八里二百二十六步三尺にかなり近い値となる。第二の場合であるならば、後世のいわゆる第一直河のうち第一横河交差点から第三横河交差点までの線分が西面、第一横河のうち第一直河交差点から婁門までの線分が北面といった可能性が想定されよう。この可能性に従うと、西面は南北直線距離のおよそ一〇分の六、北面は東西直線距離のおよそ一〇分の八となり、第一の場合ほどではないが、やはり記吳地の示している数値に近いことになる。どちらも近代蘇州城の地図から得られるおおまかな比率を使用した計算にすぎないが、しかし、いずれの可能性も捨てることができないであろう。

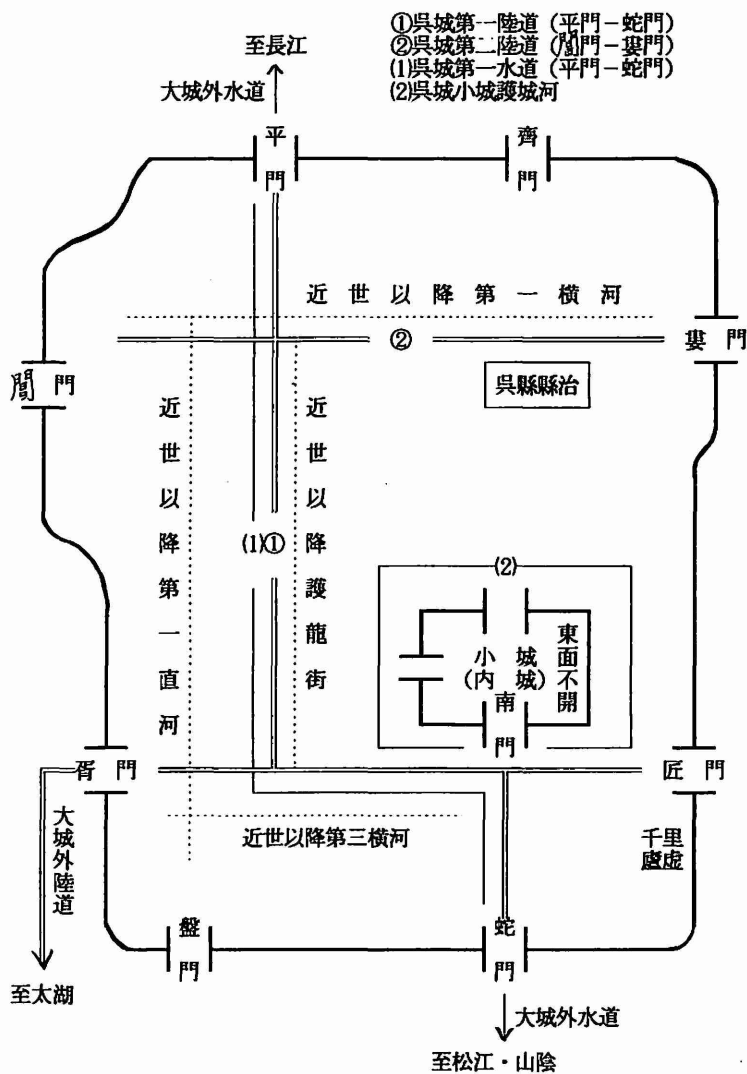
議論がここに至った以上、ではいずれの場合の可能性が高いのであろうかということになるが、もはやこれ以上の詮索は避けることとし、両方の可能性を併存させたままにしておきたいと思う。ともかく、四面の総和と周長が一致しなくとも別に不都合はないことが了解されれば、検討の目的はそれで十分果たされたと考えからである。

さて、この大城には当初八基の城門が開かれたという（一基は水・陸一門ずつがベアーになっていったという）。八基の門の設置・門名の命名ともに伍子胥の手になると考えている地志類もあるが、はたしてそうであるかどうか不明である。またいくつか伝えられる呉城大城の諸門のうち、どれが当初以来の八門であるかについても、各地志類で互いに異同があり、八門を特定することは困難である。ただ、呉地記以降の地志類は呉城創建時の八門のほとんどがそのまま後世蘇州羅城の城門に継承されたと考えている。閭門・胥門・蛇門・婁門・齊門・平門などがそれである。先に指摘したように、呉城大城の周長は唐宋以降蘇州羅城のそれときわめて近いのであるから、城門の位置

はほとんど変化せずに継承されているというこの認識にはまず従ってよいであろう。逆にいえば、呉城大城の形状は後世蘇州城の形状からおよそ類推することができるといことになるのであり、西面・北面距離の算定において近代蘇州城の地図から得られる比率を援用したのは、これがために他ならない。

ではこの大城の始建はいつのことであつたか。もちろん、これに対しては、それは記呉地・内伝はじめ多くの地志類が伝えるように闔廬の時代に決まっているではないか、という非難が当然返ってくるであろうが、しかしこの意見に無条件に従つては実は不注意のそしりをまぬかれない。なぜなら、国都城壁の始建といったエポックメイキングな治績を闔廬のような著名人物に仮託するのは、先秦・秦漢伝承形成の際にみられる常套手段であつて、実際の始建はもっと時代のさがる可能性があるからである。疑いはじめればおそらく際限のない問題なのであるが、この呉城大城に限っては、次の考証によつて闔廬時代始建の事実であることが確認されることと思う。その考証手段は八門のうちの胥門である。というのも、左伝哀公十一年に呉の上軍の将として「胥門巢」の名がみえ、これによつて該時点つまり魯哀公十一年Ⅱ呉王夫差十二年B・C四八四年における胥門の实在を確認することができるからである。<sup>(8)</sup>胥門の实在は大城そのものの实在に他ならず、呉城大城は夫差十二年にはすでに存在していたのであつて、とすれば、その初建を夫差の父闔廬の時代にかける諸書の理解はまずまちがいないといつてよいであろう。大城始建は闔廬時代であるという当然といえは当然の大前提を、今あらためてここに設定することができるのである。

# 《古代吳城城郭概念圖》



## 二 郭

次に周長二八kmにも及ぶという郭の検討に移ろう。この郭には当然郭壁が存在したと考えねばならないがそれはどのような規模であつたのか、また郭門はどこに何基開かれていたのか、これらの点については推測する手だてが残念ながらあつたたく残されていない。ただ、その郭域が大城外のどのあたりに広がっていたのかという点については、記吳地の次の二記事によつて部分的にはあるがその区域を推測することができる。

### (1) 吳古水道、出平門、上郭池、入瀆。

この記事によれば平門の外側に郭池があつたというのであるから、平門の開かれていた城壁つまり大城北城壁の外側のある部分は郭域の一部であつたことになる。

### (2) 閭門外郭中冢、闔廬冰室也。

この記事によれば閭門の外側に冢があり、それが「郭中の冢」とよばれているのであるから、閭門の開かれていた城壁つまり大城西城壁の外側のある部分は郭域の一部であつたことになる。

郭域の全体像はもちろん不明であるけれども、大城北部・西部のある部分がその一部であつただけはともかく確認されよう。

思うに大城建造以降、吳城の城域はしだいしだいに大城外にも広がるようになり、ある時点で周長およそ六十八里の郭域が設定され、あわせてなんらかの郭壁が建造されるに至つたのであろう。右の二記事の「郭池」・「郭中」の例のように、記吳地には各所に「郭」が見えているが、これはもちろん六十八里余のこの郭についていっているに

ちがいなく、そして、越絶書成立のころつまり後漢はじめごろにはまだある程度郭壁が残存していたにちがいない。「郭中」というからには「郭外」との境界がなければならず、規模はどうであれどうしても郭壁の存在を想定しなければならぬからである。

さて問題はこの周六十八里余の郭城の設定年代（それは郭壁の始建年代でもある）と廃棄年代である。まず設定年代であるが、確実な論拠を示すことはできないものの、大城初建時代Ⅱ闔廬時代にはいまだ設定されていなかったのではなからうか。それは次の理由による。

a 記吳地の記事であるが、本章冒頭に示したように、大城の周長・大城陸門水門の数・大城東西南北面の長さを記して、「闔廬所造也」と続け、そのあとに「吳郭周六十八里六十步」という郭壁記事を載せている。もし越絶書の作者が郭壁の築城をも闔廬時代であると理解していたなら、「闔廬所造也」は「吳郭周六十八里六十步」のあとにきてしかるべきであろう。それがそうでないということは、郭壁築城は大城築城と同時代ではなく、もつとあとの時代と理解していたためではなからうか。

b 内伝の闔廬吳城建造記事は大城・小城だけを挙げ、この郭を挙げていない。

c 他の地志類も内伝と同様である。

たとえ闔廬時代に郭城の形成がはじまっていたとしても、周長六十八里余の郭城が設定される段階にはまだまだ至っていなかったと考えねばならないであろう。

とすれば、その子夫差以降のある時代にその設定年代を求めねばならないことになる。ここで注目されてくる

のが、記吳地の次の記事である。

故有郷名苻邑、吳王惡其名、内郭中、名通陵郷。

この記事の示すところは、呉城西南十五里と伝えられる苻確山<sup>9)</sup>の近くにかつて苻邑という郷があったが、呉王はその郷名をにくみ、その郷を郭中にいれるとともに郷名を通陵郷と改めた、というものである。「内郭中——郭中にいれる」とは、住民を郭壁の内側に移住させたことをいうのであろうが、呉王がこのような措置をとったという以上、当然当時郭壁が存在していたはずである。そしてこれは他ならぬ記吳地の記事なのであるから、この郭は先の「郭池」・「郭中」の郭と同じもの——すなわち今問題としている周六十八里余の郭でなければならず、したがってこの王の当時すでに周六十八里余の郭域が設定され存在していたことになる。ではいったいこの呉王とは誰か。記吳地にはただ呉王とだけ記されてそれがどの呉王であるのか判別できない例がいくつかある。この呉王もその一例なのであって、歴代の地志類にも判別に言及するものがまったくなく——そもそもこの記事自身がほとんど引用されていない——、もはや判別は不可能かとも思われるのであるが、しかし次の二つの前提が承認されるならば、判別は実は必ずしも不可能ではない。

第一の前提 越絶書の作者をはじめ当時の人々はこの呉王が誰であるか、この記事だけでたやすく判断することができた。つまり、この記事は越絶書作者の個人的知識に由来するのではなく、誰もが知っている当時流行の所伝を掲載したものである。当時の人の誰もが理解できないような、個人的な特殊な所伝は掲載されるはずがなく、したがってこの記事は史上に有名ななんらかの事件でもって



その意味が理解されるはずである。

## 第二の前提

通陵郷という名称であるが、某郷という言い方は先秦よりも秦漢によりふさわしい。したがって、この呉王は秦漢の人である可能性が高い。

秦漢それも後漢はじめごろ以前において呉王をもって名乗った人物といえ、文献所伝による限り、それは劉邦の甥にして呉王に封建されたかの劉濞を置いて他にない。劉濞といえ、いうまでもなく呉楚七国の乱の首謀者であり、鼂錯とならぶこの乱の主人公である。論じてここに至れば、呉王がなぜ作邑という郷名をにくんだのか、もはや自ずから明らかになってこよう。「作」とは鼂錯の「錯」に通じるのであって、いわば不具戴天之敵である鼂錯の名に音通する名をもった郷が自らの封国国都の郊外に存在したのである。呉王劉濞にとってそれは耐えがたい事態であつたにちがいない。さればこそ、その住民を国都郭域に取り込んで自己の掌握下におくとともに、その名を通陵郷と改めたのである。

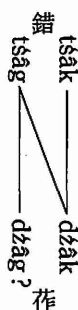
このように、呉王を劉濞とみる以外にこの所伝の意味するところを解釈する道はないのであるが、ただこの議論の論拠となっている作・錯の音通問題については今少し詳しい説明がなされねばならない。というのも、漢書・鼂錯伝の顔師古注が、

晉灼曰、音厝置之厝、師古曰、據申屠嘉序伝、賁通請錯、匪躬之故、以韻而言、晉音是也、潘岳西征賦乃讀為錯雜之錯、不可依也。

とするのをはじめ、鼂錯の錯は上古音魚部陰声で「ソ」と読むのが常識となっており、想定される作の音「在各地」

つまり「サク」とは完全には同じではないからである。

錯は上古音において魚部入声 $\text{tsak}$ （サク）と魚部陰声 $\text{tsag}$ （ソ）という二音をもっていたとされるのであるから、  
祚も魚部入声 $\text{tsak}$ （サク）とともに魚部陰声 $\text{tsag}$ （ソ）をもっていたのであれば、祚・錯の通韻はなんなく了承されることになる。—— $\text{tsak}$ も上古においては十分通じる——。ところが残念なことに祚がその上古音において陰声 $\text{tsag}$ （ソ）をもっていたかどうかは不明な状況にある。不明であるということは、祚が陰声 $\text{tsag}$ （ソ）をもっていなかった可能性があることに他ならず、もしそうであれば祚・錯の通韻は疑わしいものになってしまふのである。  
しかしながら、よしんば祚が陰声 $\text{tsag}$ （ソ）をもっていなかったと仮定しても、通韻を主張してもよい余地は十分残されている。というのも上古音にあって入声韻 $\text{tsak}$ と陰声韻 $\text{tsag}$ は押韻しているのであって、祚の入声 $\text{tsak}$ （サク）自体が錯 $\text{tsag}$ （ソ）に通ずる範囲にあるからである。



すなわち、祚が陰声 $\text{tsag}$ （ソ）をもっていたとすればもちろんのこと、陰声をもたず入声 $\text{tsak}$ （サク）のみであったとしても、祚・錯の通韻に疑いをさしはさむ必要はないのである。<sup>(19)</sup>なお、越絶書の作者が会稽の人であり、したがって祚邑にまつわる所伝が長江下流域に流伝していたものであるとするならば、そこに示されている音は当地通行の音であることになり、他地域に比べて祚・錯がより音通ししやすい言語状況にあったのかも知れない、という点もこの際一応注意しておいてよいであろう。

この酢・錯音通問題に関連しては、分析を要する今一つの所伝が存在する。それは陸広微の吳地記が載せる次の所伝である。

（平門）西北三里、有醬醋城、漢劉渢築。

劉渢が建造したといわれるこの醬醋城の醬醋という奇妙な名称は何に由来するのであろうか。醬とは塩辛であり、醋は酢と互用され酢（す）のことをいうのであるから、そういった食品・調味料の製造・保管に由来していることがまず推測されよう。また、醋には「客酌主人——客が主人に酒をすすめる」という意味もあり、少し無理ではあるけれども、塩辛でもつてする主客の応対という理解も考えられなくはない。いずれにしても、このような名称をもつて城邑に名付ける例はほとんどなく、奇妙さはぬぐうべくもないであろう。醬醋という名称が、塩辛・酢（す）あるいは主客応対といったことがらに由来するものであることを一旦認めるとしても、奇妙さを覚悟の上でわざわざこのような名称を採用した背景にはなにか別な理由が存在したのではなからうか、という想定がどうしても浮上してくる。その理由はおそらく築城者劉渢の意図に出るものであり、陸広微はその理由を知りえたからこそ、掲載の価値あるものと見てその所伝を吳地記に残存せしめたのにちがいない。記吳地の載せる酢邑をめぐる所伝の意味が明らかにになっている今、この醬醋城命名の真の理由を推測することはさほど難事ではないであろう。

醬と同意の字といえは醢であるが、醢はしばしば「肉体を刻んで塩辛にする」という意味の動詞としても使用される。たとえば、B・C六八二年、宋の南宮万と猛獲はクーデターに失敗し、捕らえられて塩辛にされるのであるが、左伝はこれを「醢之」と記し、杜預は「醢、肉醬」と注している。醢の対象になるのはなんらかの犯罪者であ

ることが多いのであるから、これが一種の刑罰として行われたことは容易に想像されるであらう。醢にこのような使用例がある以上、醬にも当然あったと考えねばならない。一方、醋の意味であるが、これが錯と普通の関係にあることはとりたてて説明の必要がなからう。醬醋とはつまり醬錯であつて、鼃錯を殺して塩辛にすることである、という解釈がここに生じてくることになる。劉渫にとつて鼃錯は極刑に処すべき敵である、しかし単なる極刑であつてはあきたらない、塩漬けの塩辛にしてしまわねばならない——醬醋城という城邑名には劉渫のこのような強い敵愾心が込められているのである。醬醋という命名の真意をこう解釈することが幸いにして当を得ているならば、この解釈は苻邑をめぐる所伝の先の解釈の正しさを強く傍証づけることになる。第一に、醬醋を城邑名にするという極端な措置を敢行したほどであるとすれば、苻邑を通陵郷に改名することはむしろ当然の措置と思われる点において、第二に、錯そのものではなく同音の醋を用いているのであるから、苻・錯の音通も当然劉渫の意識に上つていたと思われる点において、その傍証の意義が発揮されることにならう。

苻・錯音通問題の以上の検討をへて、苻邑をめぐる所伝の呉王は劉渫であること、したがって前漢劉渫時代にはすでに周六十八里余の郭が存在したことが、これで確認されたことと思う。このように郭城設定年代の下限をとにかく提示しておいて、ではさて劉渫時代以前のいつごろ設定されたのか、となると実は推測の手段がほとんどなく、検討をなしえない状況にある。古代都市の展開を通観すると、城域が極限にまで拡大するのは一般に戦国時代であつたようであり、周六十八里余の呉城郭城の設定もおそらく戦国時代であつたろうとの予想を提出して、これ以上の検討は断念することにした。むしろ、苻邑をめぐる所伝の残存によって、劉渫時代に問題の郭が存在したことを

確認できただけでも、よしとしなければならないのである。

次に廃棄年代であるが、ここでのいう廃棄とは郭城がまったく無人の地と化してしまふことをいうのではない。そうではなく、依然として居住地でありつつも、社会的・経済的あるいは政治的ななんらかの理由によって従来からの郭城の設定が無意味となり、境界としての郭壁が廃棄されて風化してしまうことをいっているのである。呉地記以下の地志類はこの郭の存在にまったく触れておらず、近世には郭壁の痕跡すら残っていなかったであろう。試みに三国志・呉書・孫権伝の昌門（閭門）についての裴松之の注をみると、

### 呉西郭門

となつていて閭門の開かれています城壁つまり大城（もしくは大城内部）を郭とよんでいる。<sup>(12)</sup>もしこの大城の外側に記呉地のいう周六十八里余の郭が依然として存在していたならば、大城はそのまま大城とよばれ閭門は郭門とはよばれなかったであろう。大城を郭とよんでいるということは、当時すでに問題の郭が存在していなかったからにちがいない。少なくとも裴松之の生きた南朝宋の時代には消滅していたことが知られるのである。おそらく越絶書成立の後漢はじめごろを下ることそう遠くない時点で廃棄されてしまったにちがいないだろう。

### 三 小城・伍子胥城

記呉地が挙げる大城・郭以外の小城は、この周長十二里の小城と周長九里二百七十歩の伍子胥城以外にもいくつが存在する。しかし、それらはすべて大城外に散在しているのであって、呉城の骨格を構成していたとはいいがた

い。呉城の骨格を構成していた大城内の小城といえ、この小城・伍子胥城の二つきりなのである。

さてまず問題となるのは、記呉地自身はその冒頭部分に「城中有小城二」と記して、大城内二小城の存在を明示しているにもかかわらず、内伝以下の闔廬築城記事はいずれも小城一を挙げるにすぎないことであろう。

記呉地 大城四十七里二百一十步二尺 小城十二里 伍子胥城九里二百七十步

内伝 大城四十七里 小城十里

呉地記 大城四十二里三十步 小城八里二百六十步

統記 大城四十里 小城十里

呉郡志 大城四十七里 小城十里

内伝・呉地記・統記・呉郡志が挙げているただ一つの小城とは、記呉地のいう周長十二里の小城のことであり、周長九里二百七十歩の伍子胥城ではもちろんない。それは、

小城、周十二里、……、門三（記呉地）

小城、周十里、陵門三（内伝）

という門数の一致にも示されているし、それに小城という記呉地の名称をそのまま踏襲している事実になによりもよく示されているはずである——内伝以下がいう小城がもし伍子胥城をいうのであれば、その名称が小城へと変更されていること、今一つの周長十二里の小城が存在したこと、こういったことが注記されていて当然しかるべきであらう——。すなわち、内伝以下の地志類は伍子胥城の存在を無視してこれを捨去し、小城のみを取り上げてこれ

を闔廬築城記事のなかに残しているのである。

内伝以下の地志類がなぜ伍子胥城を無視しえて小城を無視しえなかったか、その理由は単純である。周長十二里のこの小城は、実は歴代一貫して王府・郡治・州治・府治の存在する呉城の内城として継承されていたのである。姑蘇志・城池門によると、闔廬時代の創建から元末張士誠の時に至るまでのおよそ千九百年もの間、内城として機能し続けたという。

子城在大城東偏、相傳亦子胥所築、周十二里、高二丈五尺五寸、厚二丈三尺、歷漢唐宋、皆以為郡治、張士誠僭窃時、為大尉府、繼經敗燬、城夷圯略盡、今獨存南門類垣。

内伝・呉地記・統記・呉郡志の作者の時代にも内城として現に存在していたのであり、しかも闔廬創建以来のものと信じて疑われていなかったのであるから、これら地志類が闔廬築城記事からこの小城をはずすことなど到底できない。これに対して伍子胥城の方は後世そのような機能を与えられなかった上に、あるいは廃墟化していたのであろうか。後世の地志類がその存在を無視してもいたしかたのない状態にあったのであろう。内伝以下の闔廬築城記事が周長十二里の小城のみを取り上げているのは、むしろ当然の措置といえるのである。

王宮などの中枢建造物を囲む内城は都市創建の際には真先に築城されねばならず、呉城築城の際にはその機能をもつものとして周長十二里の小城が築かれたのであり、その闔廬時代の始建を疑う理由はどこにもない——小城・内城いずれでよんでもかまわないのであるが、便宜上、以下では小城に統一することにしたい——。また、これがその後郡治や府治の所在する小城として継続使用されたことも、別の位置に小城があらためて築城されたとの所

伝は見当らないのであるから、まずは確かなことといってよいであろう。

ただ、閩廬築城の小城——ことにその内部建造物が何の改造をうけることもなくそっくりそのまま後世に継承されたのか、といえはそれはそうではなかったはずである。この改造問題について若干の検討を試みておこう。

記呉地は小城内の建造物と思われる二つの建物について次のような記事を残している。

今太守舎者、春申君所造。

今宮者、春申君子假君宮也。

ここにいる太守とは越絶書の作者のころの太守、つまり会稽郡太守であり、その官舎は春申君の建造にかかり、また今宮とは太守の官庁を指すにちがいないが、これも春申君の子仮君の宮殿がその前身であると伝えているのである。ちなみに、呉郡志・官宇は当時——呉郡志成立当時つまり宋代——太守の官庁が黄堂とよばれていたことの由来を記して、

黄堂、郡國志、在鶏陂之側、春申君子假君之殿也、後太守居之、以數失火、塗以雌黃、遂名黃堂、即今太守正廳是也、今天下郡治、皆名黃堂、昉此。

と伝えている。これによる限り、記呉地という春申君子仮君の宮殿は漢代会稽郡太守の官庁となつたばかりか、その後も歴代郡治の官庁として継承され宋にまで至っていたことが知られよう。小城の始建は閩廬時代であり、その後歴代の小城として継承された、というのが内伝以下の地志類の共通認識であるにもかかわらず、こと小城内の官舎・官庁となると、それら地志類のほとんどがその前身を閩廬の宮殿ではなく春申君あるいはその子仮君の宮殿に



求めているのは、どういふことなのであろうか。ここで、注目されてくるのが史記・春申君列伝の次の記事であつて、これによつて春申君時代におけるなんらかの築城の事実が確認されるのである。

春申君因城故吳墟、以自為都邑。

考えてみれば、閶廬の創建した吳都吳城は春申君以前にすくなくとも二回の破壊を被つていたはずである。第一回は吳滅亡時の越軍侵攻によるものであり、第二回は越邑となつたそれを楚が奪取した際の楚軍侵攻によるものである。「吳墟」と記されることからすれば春申君の封邑となつた当時の吳城はかなり荒廃してたとみななければならぬ。「城故吳墟」とはどの築城を指していつているのか明らかでないが、その築城をももちろん含めて、この荒廃した都市を復興・新生させるためには、相当広範囲で大規模な改造を必要としたであらう。その際、まず手がつけられたのは都市の基幹部である小城であつたはずであり、その整備なくしては支配者として赴くことができない——春申君は實際は赴かず、代理としてその子が赴いたとされる。すなわち仮君である——。さらに、具体的には小城城壁の整備と小城内宮殿の整備がその中心をなしたのであらう。その際、閶廬創建城壁・建造物の遺構がどれだけ残存しており、どれだけ利用されたかは不明であるものの、小城内宮殿に限つていえば、新たに整備された宮殿はもはや「閶廬所造」・「閶廬宮」とはよぶことができない、それはどの規模の大改造であつたことはまちがいない。だからこそ、それは「春申君所造」・「春申君子假君宮」とよばれて、後世の所伝に残されているのである。

そのように小城内宮殿が大改造されたことは、小城外の諸設備が整備・改造されたことから裏付けられる。というのも、倉・市・里門・獄庭といった小城外必備の設備の設置が、記吳地ではすべて春申君の創建とされている

のである。

吳兩倉、春申君所造。

吳市者、春申君所造。

吳諸里大閘、春申君所造。

吳獄庭、周三里、春申君所造。

自らの都邑にふさわしい古代都市にするため、このように諸設備を小城外に設置したとなれば、小城内宮殿にもそれ相應の整備を当然試みねばならない。内外の整備があいまってこそ、吳城の復興と新生が完全なものになったのである。

春申君時代に小城内宮殿に大改造のあったことがこれで了解されたと思う。後世の地志類が小城内官舎・官庁の前身を、闔廬創建の宮殿ではなく春申君とその子仮君のそれに求めている理由も、自ずから明らかになったはずである。そして、吳郡志・宮宇の先の一記事が示しているように、火災などの罹災をうけながらも、春申君子仮君宮は後世の太守官庁に継承され続けた。それは結局、小城内の宮殿・官庁にかぎる限り、秦漢以降には春申君時代の改造に匹敵するような大改造が行われなかったことを意味するのであろう。もし、秦漢以降のある時点で大改造が行われていたなら、その大改造にかかる種のある種の官庁建造物の前身は、当然春申君以外の誰かの創建に求められているはずなのである。

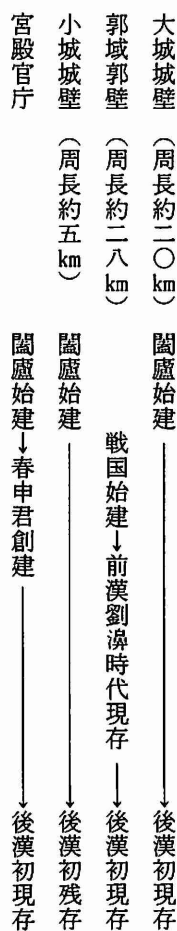
なお、この春申君時代の宮殿大改造を検討する過程で派生してきた一つの問題がある。それは、小城城壁と大城

城壁の改造の程度問題である。小城内宮殿の場合、それは改造というよりむしろ新築というにふさわしい、創建者が闕廬から春申君及びその子仮君に変更されるほどの大規模なものであったのであるが、小城城壁・大城城壁においてはどの程度の改造が施されたのであろうか。もともと、まったく手が加えられなかったというのであれば、問題とはなりやうがないが、しかし常識からいってそうは考えにくいであろう。先にも指摘したように小城城壁の場合、ことに整備が必要だったはずであるし、大城の場合も新たに楚門が開かれているほどであるから、かなりの修築が実施されたはずなのである。その程度を推測する手だてはもはやないのであるが、しかし小城城壁・大城城壁の周長・形状に大きな変化をもたらすようなものでなかったことだけは、認めてよいであろう。なぜなら、この春申君時代の修築策にもかかわらず、歴代の地志類はこの二城壁の創建を依然として闕廬にかけているからである。闕廬創建の城壁の形状をとどめぬほどの大幅な修築がなされたなら、小城内宮殿と同様、その創建は春申君にかげられることになったであろう。要するに、小城城壁・大城城壁の周長・形状には根本的な変化はなかったのである、根本的な変化が生じたのは内城内の宮殿建造物のみであったと結論づけられるのである。

\*ここで、内伝の伝える小城の周長十里について注意をはらっておきたい。再三示したように、記呉地の伝える大城の周長は四十七里二百一十步二尺、小城のそれは十二里であった。内伝が大城周長を四十七里としているのは、概数とみればまず正しいわけである。では、小城の周長十二里を十里にしているのは、どのような処理がなされたことなのだろうか。二里を切り捨てて概数十里にしまったとすれば、あまりに乱暴といわねばならない。ちなみに、呉地記のいう八里二百六十步は唐里で計算すると四八八二mとなり、十二里Ⅱ四九七

四mをかなり正確に概数を使わず伝えているのである。もし敢えて乱暴な処理がなされなかったとすれば、考えられる事情はただ一つ、内伝の数値は記呉地から採用したのではなく、記呉地以外の別の情報によったにちがいない。なにせ作者趙曄は会稽の人であって呉城に関する情報は十分手もとに集まっていたであらうし、それにそもそも越絶書と呉越書の成書年代のあとさきはなんとも言えないのであるから、なにも内伝が記呉地によったと考える必要はないわけである。おそらく、内伝のよった情報には大城周長四十七里・小城十里とあったのであり、趙曄はさほど気にとめることもなく、この数値をそのまま採用したのであらう。内伝がこのような事情によつて正しい数値十二里を取り上げ得なかったのはいたしかたのないこととして、記呉地・内伝両者の数値を比較することのできた宋の呉郡志が、内伝の数値をそのまま採用し正しい数値十二里を無視してしまったのは、不注意のそしりをまぬかれないであらう。

以上、記呉地が呉城の骨格として伝える大城・郭・小城（内城）・伍子胥城および小城内宮殿官庁類の始建・沿革・構造について検討を加えてきた。論点を整理し、本研究が対象としている古代——越絶書成書の後漢初め以前に限って結果を図示すれば、次のようにならう。



伍子胥城（周長約四km）

闔廬始建

↓後漢初現存

## 第二章 小城・陸道水道の配置

### 一 小城

前章で明らかにしたように、闔廬以来元末に至るまで、子城の周長・形状にはほとんど変化がなかったのであるが、それは結局子城の位置に変動がなかったことでもある。すなわち古代呉城の小城の位置は後世蘇州城の小城のそれにほぼ一致しているのであり、そこで「子城在大城内東偏」という先の姑蘇志の記載によって、まず大城内東部というおおよその見当を得ることができる。そして、宋平江図によってもう少し限定を加えると、大城中心東南ということになる。小城は大城の中央部に位置していたのでは決してなく、強いて四辺形をつくるなら、近世の南北大道である護竜街・大城東壁・第一横河・大城南壁を四辺とする長方形の中央部に位置していたのである。

中国の古代都市において小城の位置がこれだけ明確に推測できる例は他にあまりなく——先秦曲阜城・臨淄城の小城の位置は、文献資料・考古資料をあわせても推測困難な状況にある——、右の限定が得られただけでも十分満足せねばならないのであろうが、ここではさらに進んで、もっと詳しい配置を推測してみようと思う。というのも、この点、記呉地にはその資料的価値を発揮する記事が残存していないものの、幸い内伝が姉妹相補うか

のように次の一文を残しており、かなり正確な推測が期待できるからである。

欲東并大越、越在東南、故立蛇門、以制敵國、吳在辰、其位龍也、故小城南門上、反羽為兩鯢饒、以象龍角、越在巳地、其位蛇也、故南大門上有木蛇、北向首內、示越屬於吳也。

ここに見える蛇門とは大城南壁に開かれた二門のうちの東側のそれと伝えられる城門である——西側のそれはいうまでもなく盤門である——。大城全体からみてその位置は南南東に当たるが、なぜこれが蛇門とよばれたか、この一文を読むとすぐさま了解される。蛇門の設置は東南の大国越の制圧を象徴しているのであるが、中央からすれば正しくは南南東よりの方向つまり十二方位の蛇の方向であり、したがって蛇門と名付けられたのである。蛇はすなわち越の象徴に他ならない。ところで、方位でいうと吳は十二方位の龍の方向——つまり東南東よりに位置していることになるという。吳城と越都（会稽）の位置を考えるとまずは合点のいく方位比定といわねばならない。龍はすなわち吳の象徴である。そこで、小城の南門には龍の角を象徴する反羽の形を持った鯢饒（山椒魚か）の模型が設置されていた。反羽とは何であるのか、明らかにしがたいが、おそらく「そり上がった羽」であり、要するに反羽形の鯢饒とは「しゃちほこ」のようなものであったにちがいない。それが二基設置されていたというのであるから、南門の両側に一基ずつ設置されていたのであろう。一方、越は蛇の方向ということで、それを象徴する木製の蛇が南大門に設置されていた。この南大門とはもちろん蛇門のことではなくてはならない。その木製の蛇は北向きで首が蛇門の内側に入り込むように設置されていたが、それは越が吳に服属することを示しているのだという。吳城におけるこのような城門付属物の設置は、越を制圧せんとする吳の強い意志が端的に表

現されたものだといえよう。

問題はこの一文の内容から推測される小城南門と蛇門の位置関係であって、木蛇が北向首内のかたちで二基の反羽形鯢鱣に従属しているというからには、この二門は南北一直線上にあったはずである。そして、呉の象徴である龍の角をかたどった鯢鱣が設置されていたからにはその南門は小城南壁の中央門——後述するように一門しか開かれていなかったのであるから中央門でしかありようがないのであるが——、すなわち小城の正門であったと見なければならず、そこから真南にむかって大城南壁につきあたったところに蛇門が開かれていたわけである。小城の正門に通ずる城門となれば、その重要性は他の大城城門に抜きんでおり——大城の正門といつてよい——、この蛇門が南大門とよばれていることも十分合点がいくであろう。呉城の小城は、このようにその南門（小城正門）が蛇門（南大門）の真北に相当するよう配置されていたのである。

内伝はこの一文を闔廬築城記事のなかに残しているのであり、闔廬始建の当初からこのような配置をとつていたと認めていたことになる。いや、春秋晩期の呉越抗争を前提としない限りこの一文の内容は理解できないのであるから、闔廬始建の際でなければこの配置はとりえないことになる。その後戦国・秦漢とどのような変動があったかの不明であるが、内伝も記呉地もなにも変動に言及していないところを見ると、後漢初めまでは一貫して始建の際の配置を維持し続けたにちがいない。

ところで、この小城には始建当初三基の門が開かれたという。この門数が記呉地・内伝ともに一致していることはすでに指摘したが、なぜ三門であったかについての内伝の説明はこうである。

築小城、周十里、陵門三、不開東面、欲以絕越明也。

つまり、小城東壁には越との断絶を示すために門が開かれなかったものであり、したがって三門は北壁・西壁・南壁にそれぞれ一門ずつ開かれていたことになる。一城壁一門となれば、おそらくそれは各城壁のほぼ中央部に開かれていたのではなからうか。ことに南門の場合、それが小城の正門であった以上、南壁の中点に存在したと考えてまずまちがいないであらう。そこは、呉の象徴である龍の角をかたどった蜺蜺が設置されるにふさわしい位置であつたのである。

\* ここで古代呉城における呉県治の位置について一言しておきたい。秦漢時代、呉城は会稽郡郡治の所在都市であるとともに呉県治の所在都市でもあつた——後漢順帝永建四年以後会稽郡が会稽・呉郡の二郡に分割され、呉城には呉郡の郡治がおかれることになる——。この呉県治はどこに存在していたのであらうか。後世の地志類はすべて、それは秦漢以降唐の萬歲通天間に至るまで一貫して小城の北に大城内東北部に位置したと伝えている——萬歲通天間とは呉県から長洲県が分割された時であり、以降、それまでの呉県治は長洲県治となり、呉県治は大城内西部に新たに創設される——。これ以外の場所に比定する所伝はなく、古代呉城の呉県治は大城内東北部に存在したと信ずるしかないが、これが呉県設置とともに全く新たに建造されたのか、あるいは先秦以来のなんらかの建造物を利用したのか、その点については何の所伝も残されていない。呉郡志・橋梁には、

長洲縣前、舊為闔廬故跡、縣前東南、故傳、皆闔廬苑囿遊憩之地。



とあって、宋の長洲県県治つまり秦漢吳県県治の近辺には闔廬の故跡が存在したことが知られる。あるいは、吳県県治自身も闔廬の故跡の後身である可能性がないわけではなからうが、それを裏付ける資料はなく不明としておく他ないであろう。

## 二 陸道・水道

近世蘇州大城内の大道といえは、いうまでもなく護竜街（臥竜街）である。宋平江城坊考が引用する張紫琳の紅欄佚乗は、こう記している（巻一・西南隅）。

臥龍街、南北直貫城中、形家云、街為龍身、北寺塔為尾、府學為首、雙塔為角、取辰巽之氣也。

すなわち、街路は寝そべる竜の形をとっていたというのであり、してみると街路名としては本来は臥竜が正しく、いつしか訛して護竜となったものであろう。また水道＝運河は、三横四直といわれるように南北四本・東西三本の大水道を幹線としていくつかの小水道がはりめぐらされ、水郷とよばれるにふさわしい体裁を整えていた。<sup>(15)</sup>これは周知のことがらであらう。

では古代吳城大城内の陸道・水道はどうであらうか。陸道についてまずあげられねばならないのは、記吳地の次の記事である。

邑中徑、從閭門到婁門、九里七十二歩、陸道廣二十三歩、平門到蛇門、十里七十五歩、陸道廣三十三歩、水道廣二十八歩。

この邑中の径についてはすでに言及したが、閭門——婁門・平門——蛇門の距離を示すこの位置に陸道記事が並列されているのであるから、この二本の陸道は閭門——婁門・平門——蛇門の線にほぼそって走っていたはずである。巾はそれぞれ二十三歩（約三・一m）・三十三歩（約四・五m）であり、二本とも堂々たる大道であるが、ただ両者を比較すると南北大道の方が一五m近くも広く、古代呉城第一の大道となれば当然この南北大道を推さねばならない。平門から南下してどこかで東南に屈曲し、蛇門に到達していたことになるが、平門から南下となれば小城西壁の西側を通過していたことは疑いなく、とすれば後世の護竜街の行路とはほぼ重なることになる。蘇州大城内第一の大道が古代・近世ともにほぼ同じ位置を走っていたという事は、思いもかけないことになるが、はたして呉県治の北側であったのか南側であったのか残念ながら明らかでない。

その他多くの支道が縦横に走り、そしてそのうち何本かが八基の陸門に通じ、大城外の陸道へと連絡していただろう。その大城外の道路として記呉地が挙げているのは、胥門から太湖へと通じる一道路のみである。

呉古故陸道、出胥門、奏出土山、度灌邑、奏高顗、過猶山、奏太湖、随北顧以西、度陽下溪、過歷山陽龍尾西大決、通安湖。

土山・灌邑・高顗・猶山・北顧・陽下溪・歷山・龍尾・安湖といった地名の位置比定ができないのは惜しまれるが、とくにこの道路だけを取り上げて記事を残しているのは、これが水運の要衝である太湖へ通じる大道として、大城外幹線陸道の地位を占めていたためであろう。とすれば、胥門を経由してこの大道につながる大道が大城内

にも存在したと考えねばならない。それはおそらく平門——蛇門の南北大道に連絡するとともに、東に直進して匠門に到達する行路を走っていたにちがいない。

次に水道であるが、記呉地は先の邑中の径と陸道を記した記事の末尾に、

水道廣二十八歩。

と記している。大城内の水道として伝えられるのは、この一本きりなのであるが、これはどこを流れていたのであろうか。それはこの記事の記載順序に示されているのであって、「陸道広二十三歩」の次ではなく、「陸道広三十三歩」の次に「水道広二十八歩」とあるのであるから、巾三十三歩の南北大道にそっていたとしか考えようがない。すなわち、古代呉城大城内の大道といえ、平門・蛇門を結ぶ巾二十八歩（約三八m）の南北水道であったのであり、これのみしか挙げられていないことからして——閭門——婁門線に沿う水道も存在したのであるがそれは記載されていない——、他に断然抜きでた大道であったのであろう。そのことは、記呉地の挙げる大城外の大道が、この大城内大道に連絡すべく平門を起点としていることから裏付けられるのである。

呉古故水道、出平門、上郭池、入瀆、出巢湖、上歴池、過梅邸、入楊湖、出漁浦、入大江、奏廣陵。

ところで八基の陸門にはそれぞれ水門が併置されていたのであり、したがってそれぞれの水門に通ずる小水道が当然縦横に走っていたはずであるが、その様子は記呉地はもちろん内伝その他にもまったく伝えられていない。ただ、前章で引用した史記・春申君列伝春申君築城記事に対する史記・正義の次の注記にだけは少しく言及しておかねばならない。

又大内北濱、四從五横、至今猶存。

あまりにも簡略な記載ではあるが、文字通り解釈するなら、大内（小城）北側の水道には縦四本・横五本があり、それは今日——つまり正義の作者張守節の生きた唐代——にまで存続している、ということになろう。張守節はこの一文を春申君築城記事に対する注記のなかにとどめているのであるから、彼はこの四縦五横の水道がすでに春申君時代に開鑿されていたと理解していたわけである。張守節のこの理解を信ずるなら、春申君時代つまり古代の呉城には小城北側だけでも縦横九本もの水道が走っていたことになる。他の区域にも当然網のように張りめぐらされていたはずであり、古代呉城大城内における水道整備のありさまが自ずから想見されるであらう。

なお、ここで小城と大城のいわゆる護城河について若干の検討を加えておくことにしよう。記呉地は小城城壁に開かれた門を記して、陸門三門のうち二門には水門が併設されていたと伝えており、この水門につらなる護城河が存在したことはまずまちがいない。

（小城）、門三、皆有樓、其二増水門二、其一有樓、一増柴路。

記呉地・内伝はこれについて何も記載を残していないものの、後世の地志類たとえば姑蘇志・城池門は、秦漢以降元末までの小城が閶廬以来のものであることを示した前引の一文に続けて次のように記し、古代呉城小城における護城河の存在に注意をうながしている。

（子）城四面、舊有水道、所謂錦帆涇也。

この錦帆涇という名称はかつて呉王が錦の帆をしつらえた船でもって遊行したことにちなんだものであるとい

う。吳郡志・川はこう指摘している。

錦帆涇、即城裏沿城濠也、相傳、吳王錦帆以遊、今濠故在、亦通大舟、間為民間所侵有不通處。

近世には相当淤塞が進んでいたようであるが、それでも遺構が確認できる程度には痕跡が残っていたのであろう。他方、大城であるが、これに護城河が付置されていたことは至極当たり前のことであって、わざわざ説明する必要がないと考えたためか、記吳地・内伝にも後世の地志類にも、その存在を伝える記事そのものはないようである。別に疑うべくもない事実であろうから、大城八基の水門が存在した以上これをつなぐ護城河は当然存在したはずである、との傍証を提示するだけにとどめておいても、なにも支障はないであろう。

古代吳城大城内第一の陸道と水道は、右にみたように平門——蛇門のラインにそって走っていた。このことは、吳城から出発する水陸の幹線が平門・蛇門を起点としていたことを示しているであろう。先に挙げた平門起点の大道は、まさにその大城外幹線水道であったわけである。とすれば、蛇門にあってここを起点とする大道が当然存在したはずである。記吳地の次の一記事は、この点、その資料価値を十分發揮することになろう。

吳古故、從由拳辟塞、度會夷、奏山陰。

先の「吳古故陸道、云々」・「吳古故水道、云々」という記事から類推すれば、吳古故の次には本来陸道か水道のいずれかが挿入されており、転写の過程で脱落してしまったのだと考えねばならないが、それがいずれであるかを判定することはそう困難ではない。というのも、記事の配列順序は「吳古故陸道、云々」——「吳古故水道、云々」——「吳古故云々」となっており、どうみても水道が脱落していると思われるからである。もし陸道であったな

ら、「吳古故、云々」は「吳古故水道、云々」の前にきてしかるべきであらう。要するに記吳地は、大城外大水道として平門起点のそれとともに、この「吳古故、云々」のそれ、合わせて二本を挙げているのである——脱落しているのが水道であるとなれば、陸道は胥門起点のその一本のみが挙げられていることになる。先の指摘の通りである——。そして、二本のうち一本は平門起点のそれであることが明らか以上、今一本は必然的に蛇門起点のそれとならざるをえないであらう。それは、この大水道がはるか南方の要衝山陰——つまり越都會稽<sup>⑩</sup>にまで連なっていることにも示されているのであって、大城南南東の門である蛇門はその起点にまことにふさわしい位置にあるのである。すなわち、平門が長江へ通じる大水道の起点であるなら、蛇門は南方諸地域へ通じるその起点であった。

ここで注目されてくるのが、同じく記吳地が残している

千里廬虛者、閩廬以鑄干將劍、歐冶僮女三百人、去縣二里、南達江。

という記事である。閩廬が干將に命じて名劍を鑄造させたのはあまりにも有名な伝説であるが、その鑄造が行われたというこの千里廬虚は匠門の側にあったと考えねばならない。なぜなら、たとえば吳地記が、

匠門、又名干將門、東南水陸二路、今陸路廢、出海道、通大海、沿松江、下滬瀆、閩廬使干將於此鑄劍。

と記すように、その鑄造場は匠門（干將門）の側にあったとされているからである——実は匠門という門名自体が、当初干將の名をとって將門と名づけられ、それが訛して匠門となったのだという——。匠門は大城八門に含まれる城門であらうが、大城東壁の南端に開かれた門であるという。「去県二里」——吳県治から二里およそ八

五〇mという位置は匠門の位置にまさに相当するのであって、千里廬虚が匠門の側にあったことについては何の疑いも生じないであろう。問題はその千里廬虚から南へいくと江に到達すると記されている、その江とは何かという点である。それは「南」という方向からいっても、「沿松江下滙漬」という吳地記の記載からいっても、長江ではけつしてありえない。<sup>17</sup> 吳城の南方を流れる河川でなければならぬのである。記吳地には明示されていないが、それはおそらく松江つまり吳淞江において他はないであろう。記吳地がわざわざ「達江」と記している以上、小河川であるはずがなく、吳城南方第一の河川松江にちがいないのである。なお、平門起点の大数据が長江に到達することを伝えて、記吳地が「入大江」と記しているのもこの際注意しておく必要がある。長江には大を付して単なる江とは区別しようという配慮をそこに見ることができ、問題の江が長江でないことは、この点からも傍証づけられるであろう。松江——古代吳城の時代と後世ではその河道にかなりの変動があったことを予想せねばならないが——はこのように、吳城から南まわりで大海へ到達するための幹線水道であった。記吳地は、千里廬虚からこの水道に達すると記しているのであるが、蛇門起点の大数据がこれに連絡していたことも位置関係からして当然推測される。蛇門を出発した大数据は南下して松江に連絡し、さらに南下して越都会稽に通じていたのである。

蛇門は吳城大城の南大門であった。ここを起点とする水陸の大道が大城外にのびていたことは当然である。記吳地の記事からは水道のみしか確認できないけれども、陸道もちろん存在したのである——この事情は平門においても同様であって、水道は明示されているが陸道は確認することができない。確認されるのは胥門起点の陸

道のみである——。その陸道の後身を後世の地志類の中に求めることは必ずしも不可能ではないであろうが、ここでは当然存在したと主張するにとどめて、これ以上の考察は省略に従いたいと思う。

周知のように蛇門は後世水陸ともに塞がれてしまうことになる。その結果、蛇門の開塞問題が近世蘇州水利の一大問題となったことも、また周知のことからであろう。所伝による限り、古代にあっては一度も塞がれたことがない。南大門として水陸兩門をもち、期待されたその機能を十分に果たし得ていたのであろう。

## 小 結

以上、越絶書・外伝記吳地を主な資料に、古代吳城の城郭構造をなんとか描きだすことができた。期待通りの成果が得られなかったとの憾みは残るであろうが、ともかく得られた限りの知見によって吳城の平面的構図を描写し、古代都市としての城郭構造の普遍性と特有点を考察してみよう。

春秋晩期闔廬時代の始建当初、吳城には周長十二里の小城・九里二百七十歩の伍子胥城・四十七里二百一十歩二尺の三城壁が築城された。このうち、伍子胥城については機能・変遷などがまったく不明であり、考察の対象から除外せざるを得ないであろう。残るは小城・大城であるが、小城が王宮などを囲むいわゆる内城であることは自明のこととして、ではいったい大城の機能は何であったか。周長四十七里余〃およそ二〇kmという規模は、曲阜故城・臨淄故城・新鄭故城などの大城壁にほぼ匹敵するが、文献伝承によると、それら故城の大城壁は「郭」と



よばれていた。春秋晩期の呉城にも郭が存在したことは、国語・呉語や墨子・非攻下の伝える所であり、すでにみたように周長六十八里の郭の登場が戦国であると予想される以上、春秋晩期のその郭とは周長四十七里余の大城でなければならぬ。すなわち、大城は春秋晩期呉城の郭なのであって、呉城はその始建当初から他の春秋列国国都と同様、いわゆる内城外郭式の構造をとっていたのである。

春秋晩期呉城がこのように内城外郭式都市であったとすれば、分析を加えるべきものとして国語・呉語の次の二記事が注目されてくるであろう。

I 越王句踐乃率中軍泝江、以襲呉、入其郭、焚其姑蘇、徙其大舟。

II 又郊敗之、三戰三北、乃至於呉、越師遂入呉國、圍王臺。

IはB・C四八二年、呉王夫差の留守をついて越軍が呉城に侵入したことを伝えたものである。この時呉は滅亡の危機に直面するのであるが、なんとかきりぬけ滅亡には至らなかった。しかし九年後の越軍侵入に際しては、もはやきりぬけるすべがなく、ついに滅亡してしまうことになる。この滅亡時の越軍侵入のありさまを伝えたのがIIに他ならない。つまりI・IIはともに越軍の呉都侵入を伝えているのである。ただ同じ国都侵入であっても、Iは「入其郭」と記され、IIは「遂入呉國」と記されて、両者が違う事態であることが明示されていることに注意しなければならない。郭とはいうまでもなく郭であるが、左伝には「入其郭」という記事が散見する。これは、敵軍が郭にまで侵入したけれども、いまだ内城には侵入し得なかったことを示したものであり、その場合はしたがって滅亡に至った例がない。Iの越軍侵入は郭までであり、であったなればこそ滅亡を回避する時間的余裕があり

得たのである。これに対してⅡの越軍侵入は、郭への侵入を許したばかりか、内城への侵入をも許してしまった事態を示している。内城が突破されたからこそ、その中の王台が囲まれるという事態にいきついているのである。この事態に至れば、もはや滅亡しかないのであり、国語が「遂」という一字をわざわざ挿入している配慮を見落としてはならないであろう。ここで内城の突破が「入吳國」と記されていること、つまり「國」とは内城内であるという觀念が提示されていることはきわめて注目すべきであろうが、それはともかくとして、吳滅亡時——春秋晩期の呉城において最後の防衛ラインは郭（大城）ではなく内城であったことだけは確認しておきたいと思う。越との断絶を示すべく内城の東壁には門が開かれなかったという所伝がこの際想起されるのであり、そこにも最後の防衛ラインは郭（大城）ではなくあくまでも内城であるとの意識を読み取ることができるであろう。宮崎市定氏の研究は、先秦都市が山城式（内城式）——城主郭従式——城従郭主式——城壁式（外郭式）という変遷をたどったと指摘しているが、春秋晩期の呉城はまさにその城主郭従式の都市に他ならなかったのである。<sup>(20)</sup>

ところで、このような構造をもって出発した呉城は戦国以降の展開の過程で異例な事態が発生することになる。それはいうまでもなく周長六十八里の郭城の設定であり、異例というのは春秋時代の大郭壁の外側にさらに大郭壁を築いた例は他の都市にはほとんど見られないからである。おそらく、古代都市としての呉城の域域は拡大の一途をたどり、その極限としてこれが設定されたのであろう。それは古代的繁栄の象徴であり、繁栄の終焉とともに無用化していったに相違なく、後漢以降の消滅はつまりその終焉を示しているよう。ともかく、この大郭設定以降呉城は従来の郭（大城）とあわせていわば二重の郭をもつこととなった。両者を区別するため、従来のそれ

の呼び名を大城に限定するようになったのは至極当然のこととして了解されよう。

城主郭従式都市として出発した呉城がその後、城従郭主式——大城式（外郭式）という変遷をたどったのかどうか、これを証することは不可能であるし、また二重の郭という他に見えない事態の発生も一つの特色といえは特色であるといえよう。しかし、およそ二〇kmという郭壁を構え、その中に内城を配置するという内城外郭式構造においては、他の先秦列国国都の城郭構造と同一である。少なくともこの点に限っていえば、呉城は中国古代都市に普遍的に見られる城郭構造をもっていたといわねばならないのである。

では、もし探し出し得るとすれば、呉城の城郭構造にしか見られない特有点とは何であろうか。その探索はなかなか困難であろうが、強いて挙げるとすればおそらく次の二点であろう。第一は中央東南よりという内城の位置である。揚寛氏は先秦・秦漢都市の内城の位置を整理して、郭内東北部に位置する東北型（殷型）と西部もしくは西南部に位置する座西朝東型（周型）に分類しているが、呉城の内城の場合はそのいずれにも属さない。一つの特有点であるということができよう。第二は、長江下流という地域性からして当然といえは当然であるが、水道が縦横に張りめぐらされ内城・郭（大城）に都合一一基の水門が開かれていたことである。同様の例は他の都市、ことに北方黄河流域の都市にはほとんど見い出せないものであるから、これも一つの特有点といえることができる。

この二つの特有点は実は先秦楚国の郢都—江陵紀南城にも見られるものである。すなわち、紀南城の発掘・調査の結果、内城は郭内東南部の松柏区に存在したことがほぼ確実となり、また水門も郭壁において二基が確認さ

れているのである——確認されたのが二基であり、実際の門数はおそらく三基以上であらう——。さらに、紀南城の残存城壁を子細に観察すると、郭壁南壁と目される城壁の東部に南に突き出た凸部があり、大門とその広場の遺構と思われることからして、ここに南大門があつたことはまずまちがひなく、この位置も呉城のそれと一致することになる。<sup>22</sup>紀南城の残存城壁の周長はおよそ一五kmで呉城の郭（大城）より五km弱短く、形状も東西に長く、南北に長い呉城のそれとは異なっているけれども、しかしともに長江流域に存在した二つの都市が東南部の内城・水道の発達という特有点を共有しているという事実は、やはりみのがすことができないであらう。

もっとも、秦漢以降の展開となると、呉城と郢都紀南城はまったく異なつた歴史をたどつた。というのも、紀南城は戦国晩期の秦軍侵入をもつて廃虚と化し、その後は遺跡として存在するにすぎなくなつてしまふのである。かわつて出現したのが秦漢の江陵県城であり、長江中流域の名城として長きにわたつて繁栄を継続することになるが、その江陵も近年では沙市に地位を奪われてしまつてゐる。長江中流域荊州地区の首邑の位置は時代とともに、長江に近づいていつてゐるのである。それは、長江水運の活用という見地からいつて、当然の過程であつたのかも知れない。これに対して呉城は、長江沿岸の都市にその地位を奪われることなく、一貫して首邑であり続けてきている。長江水運に依拠しつつも、沿岸都市に首邑の地位を奪われなかつたのはなぜであらうか。さまざまな理由が考えられようが、太湖——松江という今一つの水運体系をもつてゐたことにその主要な理由の一つが求められよう。古代呉城における蛇門起点の水道はこの体系に連なる幹線水道に他ならなかつたのである。後世における蛇門の閉塞は、この点、蘇州の生命を制する措置であつたといつてよいのかも知れない。<sup>23</sup>

## 註

- (1) 蘇州市地方志編纂委員会では、これを記念して陸広微の呉地記・朱長文の呉郡図經統記・范成大の呉郡志・顧颉澐の呉門表隱に校訂・評点をほどこし刊行した。それらにはいずれも「蘇州建城二千五百年記念」の朱印がしたためられている。
- (2) 汪永澤「蘇州の変遷と発展」(南京師範学院地理系江蘇地理研究室編「江蘇城市歴史地理」一九八二年所収)は、通行の理解に従って、B・C五一四年としている。むろん、この通行の理解に従わない研究者も存在するのであって、たとえば廖志豪・張鶴・葉万忠・浦伯良「蘇州史話」(江蘇人民出版社一九八〇年)はB・C五〇八年という説を提示している。
- (3) 十一年説・九年説をとる例をそれぞれ一つずつ挙げておく。
  - ・隋開皇九年、平陳之後、江左還亂、十一年、揚秦帥師平之、以蘇城皆被圍、非設險之地、奏徙於古城西南橫山之東黃山之下、唐武德末、復其舊、蓋知地勢之不可遷也(吳郡圖經統記・城邑)。
  - ・隋開皇九年、越國公楊素移郡及縣橫山東五里、今復移城內(吳地記)。
- (4) 伊原弘「唐宋時代の浙西における都市発達——宋平江図説解作業——」(中央大学文学部紀要・史学科「二四」・同「江南における都市形態の変遷——宋平江図解析作業——」(宋代史研究会編「宋代の社会と文化」所収)・磯波護「唐宋時代における蘇州」(梅原郁編「中国近世の都市と文化」所収)。
- (5) 蘇州地区文化局・蘇州市文物管理委員会・蘇州博物館編「蘇州文物資料選編」(一九八〇年)に主な考古知見が収録されている。
- (6) 越絶書テキストといえ、従来張宗祥の校注本(商務印書館・一九五六年)を用いるのが通例であったが、この案祖謀氏の点校本が出て、より綿密なテキストクリティークの成果を参照できるようになった。本研究が引用する越絶書の記事は、もっぱら案氏点校本のそれであることを注記しておきたい。
- (7)メートル数は、伊原論文にならって森鹿三「漢書の一里の長さ」(「東洋学研究歴史地理編」)に示された漢里で計算したものである。その他、歴代一里の長さについては、吳承洛「中国度量衡史」などに示されている通説と思われる数値を使用した。
- (8) この点については、すでに「日知録」巻三一・「胥門」に指摘がある。
- (9) 吳地記は「岸嶠山」に、統記は「岸岑山」に作る。

・牢嶗山、在吳縣西十二里（吳地記）。

・牢嶗山、在吳縣西南一十五里（統記・山）。

- (10) 上古音の復元・押韻問題は、もっぱら董同龢「上古音韻表稿」（国風出版社・一九七五年三版本）によっている。作はこの表には載せられていないが、作・乍から類推してまずあやまりないであろう。なお、この問題については東北大学・花登正宏先生の御教示を受けた。御礼申し上げたい。

- (11) 説文・西部・醋の解説は「客酌主人也、从西音聲、在各切」であり、徐鉉の注記は「臣鉉等曰、今俗作倉故切」である。

- (12) 元和郡県図志はこれを外郭城とよんでいる。

外郭城、云是伍子胥所築、周廻四十七里（卷二五・江南道一・蘇州）。

- (13) 史記・正義の注記は

於城内小城西北、別築城居之、今圯殿也。

となっており、小城の西北に新たに築城がなされたとの理解が示されている。この西北がどのあたりを指すのか明らかではないが、まったく新たな新城壁の造築があったことはまちがいないのであろう。張守節の時代にはすでに破壊されており、近世以降に痕跡を止めていないのは残念である。

- (14) 闔廬時代の痕跡は後世宋代においても残存していたという。たとえば次の白門がそれである。

吳小城白門、闔廬所作、秦始皇帝時、守宮吏燭燕窟、失火燒宮、而門樓尚存（吳郡志・古蹟所引虞氏家記）。

- (15) 三横四直の大道といえ、蘇州城内景德路城隍廟の殿舎に残存していたいわゆる「蘇郡城河三横四直圖說碑」が有名である。「重浚蘇州城河記」・「蘇郡城河三横四直圖」・「蘇郡城河三横四直圖說」の二文・一図からなるこの碑は、宋平江図とならぶ近世蘇州研究の貴重な資料である。破壊されて八個に分解してしまっており、完全な修復がまたれる。廖志豪「蘇郡城河三横四直圖說碑」（「東南文化」一九八八・三一四）参照。

- (16) 越都會稽については、同じく越絶書の外伝記地が詳細な記載を残しており、貴重な資料となっている。外伝記吳地の活用による古代蘇州の研究が試みられた以上、いずれは、古代會稽の研究も試みられるであらう。

(17) 古文獻に見える「江」が必ずしも長江でないことについては、石泉「古文獻中的「江」不是長江的專称」(同氏「古代荆楚地理新探」所収・武漢大学出版社一九八八年)参照。

(18) 墨子・非攻下は吳國滅亡の時のことを記して次のようにいう。

越王句踐、視上下不相得、収其衆、以復其讎、入北郭、徙大舟、圍王宮、而吳國以亡。

(19) この点については、拙稿「春秋時代の都市——城・郭問題探討——」(『東洋史研究』四六・四)参照。

(20) 宮崎市定「中國城郭の起源異説」(原載「歴史と地理」三三・三、「全集」三卷)。

(21) 楊寬「中國都城の起源と發展」(西嶋定生監訳、尾形勇・高木智見共訳)。

(22) 湖北省博物館「楚都紀南城の調査と発掘(上・下)」(『考古学報』一九八二・三一—四)および拙稿「江陵紀南城考——楚郢都の始建と変遷——」(『東北大学東洋史論集』第三輯)参照。

(23) 古代吳城郭概念図の作製にあたっては、特に註(4)伊原論文所載の地図を参照させていただいた。なおこの概念図はあくまでも概念図であって、古代吳城がこの通りの形状をとっていたと考えているわけでは決していない。大城八門の位置・門名・屈曲などほとんどは復元不可能な状態にあるのである。ここでは、特に問題の多い平門の位置について若干の説明を加え、もってこの図の解説にかえておきたい。

北壁の二門といえは平門・斉門を挙げるのが通例であるが、多くの地志類は平門が西側、斉門が東側と見なしている。つまり南北線を問題とするなら、蛇門に対応するのは斉門であって平門ではないのである。とすると、記吳地が邑中南北の径を示すのになぜ斉門——蛇門を捨てて平門——蛇門を取り上げていいのか、疑問がわくであらう。この点についてもっともラジカルな意見を提出しているのは曲英傑氏新著「先秦都城復原研究」(黒竜江人民出版社・一九九一年)であって、曲氏はそこで蛇門の真北つまり斉門の位置に平門を、通説における平門の位置に斉門を比定しているのである。邑中南北の径が平門——蛇門で示されていることの理由が完全に納得されるのであるから、まことに魅力的な意見というべきであり、賛意を表したい誘惑にかられるが、現段階ではやはり態度を保留し通説通りの位置比定に従っておきたいと思う。それは次の理由による。曲氏のいう通り古代吳城の斉門と平門の位置が、後世地志類のいう位置と反対であったならば、それら地志類がどこかにそのことを記していてしかるべきではなか

ろうか、これが一点。南北邑中の径についてはこれで納得できるとして、平門——蛇門にそった呉城第一の水道と陸道が小城の真ん中に走ることになるが、これをどう解釈するか、これが二点である。もしこの二つの疑問が解決されたならば、曲氏の新説は多くの賛同を得て定説化することになるろう。

通説通り平門は北壁の西門であることを傍証づけるものとして、記呉地自身に次のような記事がある。

(劉) 賈築吳市西城、名曰定錯城、屬小城北到平門、丁將軍築治之。

呉市が設置された西城とはどうみても小城の西側の城としか考えようがない。それは東は小城に接続し、北へ向かえば平門に到る、というのであるから、平門は小城の西北方向に当たることにならざるを得ないのである。

では南北線上にない平門——蛇門のラインが邑中南北の径を示すのに用いられているのはなぜか。本稿の意見は実は単純なのであって、平門の真南には門はなく、盤門では西にすぎ蛇門では東にすぎることが、なんらかの理由で蛇門が採用された、というものである。他方、齊門——蛇門が用いられなかった理由といえ、大陸道・大水道の起点である平門のほうが齊門に比べてより適切であったためであろう。要するに、平門・蛇門は北壁・南壁の第一の門であり、正しい南北線上にないことを承知の上で邑中南北の径を示す際に採用したのにちがいない。したがって、示されている十里十五歩という距離は平門——蛇門間の直線距離ではなく実際の正しい南北直線距離であり、それを平門・蛇門の二点に代表せしめて指示したのだという可能性も捨てきれないであろう。この事情は閭門——婁門の東西距離においても想定しなければならないものである。

このように曲氏の新著と本稿では意見を異にしている点もあるが、しかし本稿の意見を補完する点もかなり存在する。本来ならば曲氏の各論点を逐一紹介すべきなのであるが、この新著を手にしたのは本稿執筆の途中であり、その余裕のないままにとりあえず右一点の指摘にとどめ、全体にわたる紹介と検討は後日を期したいと思う。

(一九九二年九月一日 稿了)

※本稿は平成四・五年度科学研究費補助金総合研究A(代表、安田二郎東北大学教授)による研究成果の一部である。